2012(平成24)年度　事業報告及び附属明細書

公益財団法人国際文化フォーラム

TJF

2012年度は当初計画していた事業を概ね順調に実施することができましたが、一部計画を変更した事業がありました。その一つが、日本の教育代表団の中国派遣事業です。11月の実施を予定していましたが、その1ヵ月前に主催団体である中国国家漢弁より、期限を決めずに当分の間延期したいとの申し出があり、やむを得ず中止といたしました。

2011年3月に5000部を発行した『外国語学習のめやす2012』が予想を上回るスピードで無償配付終了したことに伴い、年度当初の事業計画にはありませんでしたが、一部改訂し、ブックインブックで付加価値を加えた市販版を2013年1月に3000部印刷し、販売を開始しました。

2012 年度の新規事業として実施いたしました、「好朋友モデルカリキュラムの開発・カリキュラム作成教師の日本招聘」、「学習のめやすウェブサイトの制作・運営」、「協働を生み出すプログラムの開発」、「中国語実施校校長の経験交流会」、「日韓中高校生交流プログラム」につきましては、いずれも大きな成果をあげることができ、2013 年度も引き続き内容を拡充し実施してまいります。

これらの事業をはじめ、4 つの公益目的事業別に、新しい取り組みを中心にご報告いたします。各事業の詳細は7～11ページに掲載しています。

公1 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

■『好朋友』全国展開の準備完了

TJF が 2006 年から 2009 年に大連教育学院と共同で編集・制作した日本語教材『好朋友』は、これまで東北三省を中心に無償で配付し、普及に努めてきましたが、2013 年 1 月には北京の外語教学与研究出版社により市販化されました。

『好朋友』を活用する日本語教育の現場は、履修形態や時間数が多様です。その状況に対応するため、この教材を活かした日本語教育に実績のある東北三省の5名の教師と2名の日本語教育専門家に依頼し、参考カリキュラムの開発も行いました。『好朋友』でより多くの若い人たちに日本語や日本文化に触れてもらうことをめざして、2011 年 11 月にオープンした「好朋友WEB」では、漫画大連物語の全てを日中両言語で読めるようになりました。市販化、モデルカリキュラム、ウェブサイトを通して『好朋友』が提案するコミュニケーション能力を育むことばの学びを中国各地に広めていきます。

■4 言語で日本文化を発信する新生「くりっくにっぽん」

2011 年度に日本語教師向け情報誌『Takarabako』『ひだまり』の両誌を休刊し、日本情報発信サイト「くりっくにっぽん」での発信に一本化しました。2012 年度は、日本語を学ぶ人、教える人、日本に興味がある人等を対象に、いまの「日本」についての情報を多角的、多面的な切り口、多様な視点で発信することをめざし、新しいサイトのコンセプト、構成、コンテンツの検討を行い、これまでのコーナーの全面的見直をしました。考え方や生き方に着目し、

その人の視点を掘り下げることが、読み手の「考える」を刺激することを基本方針に生まれ変わった「くりっくにっぽん」は、2012 年 10 月に日本語版、11 月に英語版、12 月に中国語版をオープン。日本語を学ぶ中高校生は韓国が世界でもっとも多く 77 万人に上ること、これまでも韓国語で読みたいという声があったことから、2013 年 3 月に韓国語版を新規オープンしました。

2012 年度は新たな試みとして、明治大学のゼミと連携し、日本で話題になっているテーマを取り上げ、そのテーマに関わる人たちがなぜ“はまった”のか、きっかけは何だったのかなど心の裡について語る「My Way Your Way」に掲載する記事を、大学の現場で TJF のプログラムを実験的に行うかたちで制作しました。

■メナーシャ合同学区で日本語教育の存在感をアピール

米国内でも有数の小中高校一環の日本語教育を実施している、米国ウィスコンシン州メナーシャ合同学区は、2012 年度、野間佐和子記念寄付金の二年度目の寄附金を使った日米間の生徒交流、特に直接交流に力を入れました。2012 年 3 月に同地区の代表団を招聘したおり、TJF の仲介で高知県にある私立明徳義塾高等学校を訪問したことがきっかけとなり、漫画をテーマにした交流が同校とメナーシャ高校間で始まりました。2013 年 2 月には、明徳義塾高校の漫画部の学生 2 名と同部を指導している漫画家が 2 週間の日程でメナーシャを訪問し、ホームステイをしながら、日本語を学んでいる 200 人の生徒と漫画のキャラクターづくりに取り組みました。

滞在中に開催された、メナーシャ合同学区の日本語教育 20 周年を祝う市民公開イベントでは、制作したキャラクターが図書館に展示され、地区全体への日本語教育のアピールにもつながりました。今後も明徳義塾高校との交流は継続され、来年も生徒の招聘が予定されています。こうした活動が、メナーシャ地区では、日本語教育の安定的な発展につながると、教育行政をはじめ関係者から賞賛を受けています。

公 2. 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

■「めやす」を現場で活用してもらう

2011 年 1 月に発行した『外国語学習のめやす』をより多くの先生方に活用していただくことをめざし、2012 年 6 月に「実践サポートめやす Web」をオープンしました。「めやす」を取り入れた授業づくりに役立つ素材として、サンプル単元案全 149 案をはじめ、話題分野別の語彙・表現例、文化事象例を掲載しています。「めやす」式授業を実践した先生方の報告を掲載するチャレンジコーナーを設けるなど、ユーザーのニーズや関心にあわせて活用できるようにしました。

「めやす」の提案が現場で活用されることをめざして、2009 年度から毎夏実施している 5 日間の研修を、2012 年度ははじめて大阪で関西大学との共催事業として実施しました。テーマに取り上げたのは、学習動機と学習効果を高める評価。4 年間実施してきたテーマの中では、最も要望が高いものでした。ルーブリックを使って実際の評価づくりに取り組んだ参加者からは、「2 学期からすぐに取り組みたい」「ぜひ、取り入れて自分のものにしたい」とのコメントが寄せられるなど、実践につながるものでした。

こうした研修を年に一度、一ヶ所で実施するだけでは、中国語、韓国語をはじめとする外国語担当教員の間に「めやす」の考え方を広めることは難し

いと考え、2013年度以降は全国各地でワークショップ型の研修を開催すべく、講師の養成やテキストづくりに取り組んでいきます。

2012 年度当初は、年度内に研修用の教材を制作し、2013 年度から各地で研修を展開することを計画していましたが、そのためには、教材とともに講師の育成が喫緊の課題であるとの認識から、まず、講師養成をめざした「めやすマスター研修」(2013 年度実施)を優先させ、そのカリキュラムづくりに取り組むとともに、中国語、韓国語以外の言語への「めやす」の拡大を目標に6言語(仏、独、西、露、日、英)のマスター候補探しを行いました。研修教材の制作は、マスター研修参加者の協力も得ながら 2013 年度に行うこととしました。

■中国語教育に取り組む校長たちの交流

TJF は 2008 年度から、高校中国語教育の定着と拡大のためには、地域の教育行政者や学校の管理職の理解と支持が必要であると考え、2008 年度から、教育代表団の中国への派遣事業を企画・実施しています。派遣中、参加者間で中国語教育に関するさまざまな情報が交換されます。こうした情報を、中国語教育に取り組むより多くの学校の責任者と共有し、継続的な交流ができるネットワークを構築したいと考え、「中国語教育取り組み校経験交流会」をはじめて企画、実施しました。

当日は関東近県だけでなく、岐阜や岡山など全国から校長や教頭、外国語科や国際交流の主任の先生方計 22 名が集まり、中国大使館教育処からは書記官 2 名が参加しました。長年中国語教育に取り組んでいる学校の校長による実践報告に続いて、グループワーク形式で日ごろ抱えている課題を共有し、その解決策について意見交換が行われました。

参加者にとって日ごろできない情報交流の場となっただけでなく、TJF にとっても地域単位での「土曜中国語講座」や「中国文化体験講座」など、大使館教育処の協力を得た新たな事業展開への布石を打つ機会となりました。

公 3. 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業

■協働を生み出す外国語教育のモデルづくり

2011 年に、沖縄、大阪、台湾等の高校教師と TJF が協力して「異なる背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力および ICT リテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルづくり」の実践研究を行いましたが、2012 年度は TJF の主催事業と位置付け研究実践を継続しました。前年度の課題を踏まえて、沖縄県立向陽高校の中国語の年間カリキュラムを改善したほか、コミュニケーション力と協働力をはかるための評価方法としてルーブリックやポートフォリオなどの導入を試みました。

年間カリキュラムは、活動の軸として台湾の高雄市立高雄高級工業職業学校(KIHS)との交流や協同プロジェクトを組みこみ、こうした活動に必要な語彙・表現を授業で習得し、高雄の高校生との対話やプロジェクトで学んだ語彙・表現を使う構成としました。昨年に続いて向陽生が高雄を訪問したことに加えて、今年度は KIHS 生の沖縄訪問を実現することができました。さらに、KIHS との交流活動では、テレビ会議システムや教育向け SNS など、コミュニケーションを継続的に行えるようさまざまなソーシャルメディアを積極的に取り入れたほか、協同プロジェクトで写真作品づくりや映像づくりに取り組む際には、画像・映像制作、プレゼンテーションに必要な ICT ツールを活用しました。過去 2 年間のプロジェクトでは、中国語等の外国語を使ったコミュニケーショ

ン力、協働力、ICT 活用力の育成においていずれも向上が見られ、その成果を中国語教育学会や全国高等学校中国語教育研究会等で発表しました。ICT 教育関連の雑誌からも原稿依頼をいただくなど、多くの教育関係者の方々から関心が寄せられています。

■互いのことばを学ぶ高校生交流
－日韓交流プログラムへのチャレンジ－

TJF は 2011 年度より、同じ時期に同じ会場で「互いのことばを学ぶ日中の高校生サマーキャンプ」を実施しています。2012 年度も長春日章学園高校の寮で共同生活を送りながら、協同活動を行う過程で、自分の考えを伝える力、相手と意見を調整する力、新しい価値観を生み出す力などを身につけることをめざしました。

2012 年度は、同様の目標のもと、新たに韓国語を学ぶ日本の中高校生と日本語を学ぶ韓国の高校生の交流もスタートさせました。K-POP ダンスをテーマに取り上げ交流するプログラムは、韓国・秀林文化財団との共催により実現しました。

当初日本側参加者は 6 名を予定していましたが、公募した結果、全国各地から参加希望が寄せられました。面接に臨んだ応募者の熱意に圧倒され、定員の枠を 3 人増員して 9 人としました。3 回の事前研修で韓国語やダンスの練習、本番に向けての目標づくりに取り組んだ後、4 泊 5 日のソウルでのプログラムに臨みました。

ソウルでは、2 チームに分かれて K-POP ダンスを競ったり、ペアでファッション対決の買い物にチャレンジするなど、日韓の中高校生の協同活動を行いました。同時に、活動やコミュニケーションに必要な韓国語の習得をめざした授業をソウル大学言語教育院の協力を得て実施しました。

帰国後、関係者を集めて実施した報告会では、プログラム参加前と参加後の自分を振り返ってもらいました。ある参加者は、韓国に行く前は「一般の韓国人は日本人にキツイと思っていた」「全ての食べ物が辛いと思っていた」のが、「韓国人の優しさに感動した」「韓国人も辛いものが食べられないことを知った」と報告しました。今後の抱負として「いろんな国に行って、その場所に住んで、いろんな国の人の生き方を知りたい」と話した参加者もいました。一人ひとりに多くの気づきや学びがあったことがわかりました。

公4. 広報活動

■ファンドレイジングをめざした取り組み

より多くの方々に TJF のミッションに賛同し、さまざまなかたちで事業に参画していただくために、2012 年 4 月に「コラボレーター制度」を設けました。これまで 25 人の方々に登録していただき、資料作成、事業の広報、アテンドや通訳、Web の中文翻訳チェックなど、のべ 80 時間のコラボレーションをしていただきました。

5 月には新しい広報の場として、facebook に公式ページを開設しました。スタッフそれぞれが事業の現場から日々のエピソード等を発信しています。これまで発信した記事の中には、約 850 人が閲覧したものもありました。今後は発信内容や方法を工夫することで、TJF の支援者の輪を広げる有効なツールとして活用していきます。

2012年度実施事業の一覧及び各事業の報告

公1 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

1.中国東北三省教育代表団の日本招聘(定期事業)
2.中国における二外日本語教育の促進(新規事業/定期事業)
3.日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の制作・運営(定期事業)
4.好朋友ウェブサイトの制作・運営(定期事業)
5.米国ウィスコンシン州メナーシャ地区日本語教育支援(継続事業)
6.日本語教育・日本理解事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公2 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

1.日本の教育代表団の中国派遣(定期事業)
2.中国語実施校校長の経験交流会(新規事業)
3.中国語・韓国語教育関連情報提供サイト「Ringo」の制作・運営(定期事業)
4.めやすウェブサイトの制作・運営(新規事業)
5.高等学校韓国語中国語教師研修の共催(定期事業)
6.高等学校中国語教師研修の共催(定期事業)
7.教師研修用教材の作成(新規事業)
8.外国語教育・多文化理解事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公3 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業

1.世界の中高校生の交流サイト「つながーる」の運営(定期事業)
2.協働を生み出すプログラムの開発(継続事業)
3.日中の高校生サマーキャンプの実施(定期事業)
4.日韓中高校生交流の実施(新規事業)
5.交流事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公4 広報活動

1.機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行とサイトの運営(定期事業)
2.TJFの事業報告と広報資料の作成(定期事業)
3.TJFのウェブサイトの運営(定期事業)

■2012年度事業報告(事業別)

担当	事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体
公1	海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業				36,964,217円 (内、公1共通費用*21,152,274円)
1	中国東北三省教育代表団の日本招聘 (定期事業) **決算額:1,100,685円** (予算:1,814,595円) 減少理由:招聘者2名減	2012年10月1日～5日、5名	東京、埼玉	第二外国語(二外)としての日本語教育の拡大と浸透をめざし、黒龍江省の教育リーダー(黒龍江省の日本語教育を管轄する指導主事、ハルビン市の民族教育を管轄する所長など)4名と二外日本語を開講しているハルビン市朝鮮族第一中学の校長1名を日本に招聘した。 滞在中、協同学習や多様な外国語教育を推進している埼玉県教育庁と意見交換を行ったほか、中国語をはじめ複数の外国語教育を実施している学校や中国籍の生徒が在籍する学校を訪問した(私立関東国際高等学校、埼玉県立戸田翔陽高等学校)。日本の青少年の声を届けることを目的に、高校生のときから中国語を学んでいる生徒(現在は大学生や専門学校生)と交流する場も設けた。こうした交流を通じて、日本の教育・社会・文化への理解を深めてもらうことが、日本語教育への関心を高めることにつながった。	主催:TJF 助成:三菱UFJ国際財団
2	中国における二外日本語教育の促進 ①モデルカリキュラムの開発・カリキュラム作成教師の日本招聘 (新規事業) ②巡回指導 (定期事業) ③中国東北三省日本語教師研修 (定期事業) **決算額:3,451,088円** (予算:3,912,525円) 減少理由:研修実施時に巡回指導をあわせて実施したため	①2013年2月15日～21日、5名 ②2012年10月 ③-1、2012年8月29日～30日、20名(研修生) ③-2、2012年10月26日～28日、40名(研修生)	①東京、埼玉、神奈川 ②遼寧省大連市、吉林省長春市、黒龍江省ハルビン市 ③-1、遼寧省大連市 ③-2、黒龍江省ハルビン市	中国で『好朋友』を使った日本語教育を推進するために次のことを行った。 ①モデルカリキュラムの開発 現在、『好朋友』を使用した二外日本語の実施スタイルは、必修科目、選択科目、課内クラブなど学校によって異なる。こうした実情に合わせ、東北三省から5名(遼寧省3名、吉林省1名、黒龍江省1名)の中学・高校の二外日本語担当日本語教師を1週間日本に招聘した。期間中は「好朋友」が提案する活動中心の日本語教育を実施するための目標の設定や目標から授業を設計するバックワードデザインについて学びながら、それぞれの状況にあわせたカリキュラムを開発した。日本滞在中には、中学訪問、温泉体験など日本の文化・社会体験も組み込んだ。 ②二外実施校をフォローするとともに、日本語教師とのネットワークを強化するために、『好朋友』を使った日本語教育を実施している学校を巡回指導した。10月末に実施した東北三省日本語教師研修の開催に合わせ、遼寧省大連市の31中学・76中学・弘文学校、吉林省長春市の11中学、黒龍江省ハルビン市の朝鮮族第1中学を訪問し、各校の校長ならびに二外日本語担当日本語教師と意見交換した。各省の日本語指導主事と①のモデルカリキュラム作成者について相談した結果、巡回指導した学校の二外日本語担当日本語教師を任命することに決定した。 ③中国東北三省の日本語教師(一外、二外を含む)を対象にプロジェクトワークを取り入れた研修を、遼寧省大連市(8月)、黒龍江省ハルビン市(10月)で実施した。いずれも、現地在住の日本人にインタビューをし、彼らとその土地のつながりを見つけて発表する課題に、グループに分かれて取り組んでもらった。本研修では、日本語力や日本語指導力の向上に加えて、ことばを学ぶことは人とつながることだという原点に立ち返り、再認識することを目標とした。参加した研修生からは、「中国に住む日本の人たちの生活や思いを知ることができた」「日本人と日本語を話すことで研鑽がつめた」とのコメントがあるなど、研修のねらいは概ね達成できた。	①主催:TJF 助成:三菱UFJ国際財団 ②主催:大連教育学院、吉林省教育学院、黒龍江省教育学院、TJF 助成:三菱UFJ国際財団 ③-1 主催:大連教育学院、TJF 助成:三菱UFJ国際財団 ③-2 主催:黒龍江省教育学院、TJF 助成:三菱UFJ国際財団
3	日本の文化と人々紹介サイト「くりっくにっぽん」の制作・運営 (定期事業) **決算額:5,642,956円** (予算:7,415,059円) 減少理由:オーストラリア出張2名取りやめ。取材記事の翻訳を一部2013年に変更	通年	TJFサイト	2011年度に日本語教師向け情報誌『Takarabako』『ひだまり』の両誌を休刊し、日本情報を発信するサイト「くりっくにっぽん」に一本化した。日本語を学ぶ人、教える人、日本に興味がある人等を対象に、いまの「日本」についての情報を多角的、多面的な切り口、多様な視点で発信するため、新しいサイトのコンセプト、構成、コンテンツの検討を行い、これまでのコーナーを全面的に見直した。facebookなどのソーシャルメディアの活用について検討し、インタラクションにつながる方法も模索している。2012年10月に日本語版、11月に英語版、12月に中国語版をリニューアルオープン。日本語を学ぶ中高校生は韓国が世界でもっとも多く77万人に上ること、これまでも韓国語で読みたいという声があったことから、2013年3月に韓国語版を新規オープンした。リニューアル後のコーナーは以下のとおり。 My Way Your Way:いま日本で話題になっていることをテーマに取り上げ、そのテーマに関わる人たちがなぜそのことに関わるようになったのか、どう考えているのかなど、心の裡について語る。2012年度は、明治大学国際日本学部の横田雅弘教授(異文化間教育学会会長)の2年生ゼミを一つの実験の場とし、コンテンツの一部を作成した。 1/365(365分の1):日本の高校生・大学生レポーターが「お月見」や「ひな祭り」などの伝統行事に新しい世代としてどのように関わっているのか、自分にとっての記念日はどんなものがあってどういうふうにすごしているのかをつづる。 何コレ?マジコレ!?:旅行や留学で日本にやってきた海外の中高校生や大学生が発見したニッポン、ふしぎなニッポンを写真1枚とキャプションで紹介。 このほか、先生コーナーを設け、日本語教育を通じてさまざまな力を身につけさせたいと考え実践している先生方のエッセーや、くりっくにっぽんのコンテンツを活用した授業のアイデアなどを紹介。 当初予定していた広報活動は2013年度に力を入れる。	

4	好朋友ウェブサイトの制作・運営 (定期事業) **決算額:2,345,091円** (予算:2,355,100円)	通年	TJFサイト	好朋友ウェブサイトは、2011年度に漫画「大連物語」第1巻分(20ページ)のみの掲載でスタートした。2012年度は残り第2巻から第5巻を追加し、全ページ掲載となった。それに合わせて、「Enjoy！マンガ！」コーナーも内容を追加した。追加分はいずれも日中両言語で制作した。	助成:尚友倶楽部、三菱UFJ国際財団
5	米国ウィスコンシン州メナーシャ地区日本語教育支援 (継続事業) **決算額:2,939,665円** (予算:2,991,685円)	通年	米国 ウィスコンシン州 メナーシャ市	米国の初等中等教育における日本語教育の拠点地域を存続、発展させるため、ウィスコンシン州メナーシャ市メナーシャ合同学区が推進する「21世紀のスキルの育成をめざした日本語教育プログラム」に対し、2011年度から3年度にわたり、講談社の特別寄付金として年額200万円を寄贈している。 2012年度は、その寄付金でメナーシャ合同学区が実施する日米の生徒の交流活動に協力した。2012年度は、日本語を履修する中高校生180人がシカゴ近郊で日本文化体験をした他、2月に日本の高校生2名と若手漫画家をメナーシャに招聘し交流した。2013年5月にはTJFの仲介でシカゴ日本人学校との交流が予定されている。	特別寄付:講談社
6	日本語教育・日本理解事業に関するネットワーク活動 (定期事業) **決算額:332,458円** (予算:1,621,520円) 減少理由:日本語教育学会秋季大会(北海道)への参加取りやめ、関係者との会合等の減少	通年	東京、愛知など	日本語教育学会春季大会(5月・東京)、日本語教育国際研究大会(ICJLE、8月・名古屋)をはじめ、日本語教育関連の大会・研究会・会合に参加し、関係者とのネットワークを図った。	
公2	**日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業**				**30,371,609円 (内、公2共通費用*22,598,753円)**
1	日本の教育代表団の中国派遣 (定期事業) **決算額:481,961 円** (予算:2,438,396円) 減少理由:主催者の当面の延期申し出を受け事業を中止	11/20-24(当初の予定)	中国 山東省青島市	高校中国語教育の定着と拡大のためには、各都道府県の教育行政者や学校の管理職の理解と支持が必要である。これら関係者の中国語教育に対する関心を喚起するため、2008年度から、教育代表団の中国への派遣事業を企画・実施している(主催は中国国家漢弁)。国家漢弁とは、2010年度から2012年度の三ヵ年の実施について協議書を交わしており、2010年、2011年度で計59名を派遣。中国語講座の新規開講や休講していた講座復活のきっかけとなった。2012年度も11月実施予定で参加者を全国公募し、11名の応募があった。しかし、10月に主催者より当面の延期を提案されたことを受けて、本事業は中止とした。	主催:中国国家漢弁 実施:TJF 後援:在日本中国大使館教育処、在中国日本大使館、在青島日本総領事館 協力:文部科学省 輸送協力:ANA
2	中国語実施校校長の経験交流会 (新規事業) **決算額:226,891円** (予算:420,700円) 減少理由:開催場所を岐阜から東京にしたため旅費減少	12/15、24名	東京	2008年度から実施している教育代表団の中国派遣事業で構築した中国語実施校の校長とのネットワークを、継続した情報交流につなげるために、派遣事業参加者を中心とした、中国語開設校校長の経験交流会を実施した。関東だけでなく、岡山、岐阜などから、校長等管理職、国際交流担当を含む計22名が参加。中国大使館教育処からも2名の書記官が参加した。交流会では校長による実践例報告の後、参加者全員が抱えている課題とその解決法を共有し、意見交換を行うためのグループワークを行った。参加者からは次回の交流会プログラムに対する建設的な提案も出された。交流会がきっかけとなり、自校の中国語教育の位置づけを見直したり、授業改善を目的に他の実施校の中国語授業見学に担当教員を派遣したりするケースも見られた。	助成:在日本中国大使館教育処
3	中国語・韓国語教育関連情報提供サイト「Ringo」の制作・運営 (定期事業) **決算額:282,810円** (予算:597,400円) 減少理由:作業を外注せず内部で制作	通年	TJFサイト	中国語教育情報発信サイト「小溪」と韓国語教育情報発信サイト「隣語」を統合し2011年度に誕生した「Ringo」ウェブサイトは、「Ringo通信」(中国語・韓国語教育に関連する情報の提供)、「注目の1枚」(中国や韓国に関連する写真と文化背景の解説を提供)、「教師の輪・話・和」(高校の中国語教師や韓国語教師による自分とそれぞれの言語との関わりなどのエッセー)の充実に加えて、2012年度には「校長の出番」(自校への中国語・韓国語教育の導入を決定した校長の経験を紹介)を立ち上げた。また、トップページのレイアウトを一部改訂した。	

4	めやすウェブサイトの制作・運営 (新規事業) **決算額:1,249,494円** (予算:1,264,000円)	通年	TJFサイト	2011年度に公開した「外国語学習のめやす2012」(以下「めやす」)は冊子とウェブサイトにより全体が構成されている。2012年度は、「めやす」をより多くの現場で活用してもらうことをめざし、「実践サポートめやすweb」を開設した。ウェブサイトには、学習内容や活動例、授業案など、豊富な素材を公開し、現場の実践例も収集して掲載している。 また、『外国語学習のめやす2012　高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』5000部の無料配付が予定よりも早く終了したため、一部改訂し、ブック・イン・ブック等の付加価値をつけた市販版『外国語学習のめやす　高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』(3000部)を2013年1月に発行した。外国語教育関連の学会や研究会等での販売やネット注文を通じて3ヵ月間で258冊を販売した。	
5	高等学校韓国語中国語教師研修の共催 (定期事業) **決算額:2,889,220円** (予算:3,013,238円)	8/3-8/7	大阪	TJFが開発した『外国語学習のめやす』の基盤となっている外国語教育の理論と考え方を全国の韓国語、中国語およびその他の外国語教師と共有し、活用してもらうことをめざした研修を2009年から桜美林大学と共催してきたが、2012年度は初めて関西大学と共催で大阪で実施した。 前半3日間は、広く高等学校を中心とした外国語担当教師を対象とし、當作靖彦氏(主任講師、カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)による講義が行われた。今年は、これまでのコミュニケーション能力が身につく外国語教育のあり方というテーマから一歩進んで、21世紀のグローバル社会を生きぬく力を育む外国語教育のあり方というテーマで講義と議論が行われ、その中で、ポストコミュニカティブアプローチとしてのソーシャルネットワーキングアプローチが提案された。3日目は、「めやす」に基づいた評価をテーマに當作氏による講義とワークショップが行われ、5日間でもっとも多い85名の参加者を集めて行われた。 4日目、5日目は、韓国語教師と中国語教師が、「めやす」に基づく評価づくりにグループで取り組んだ。今年から講師、研修生ともにそれぞれの母語を使う形式をとったことにより、より深い議論が行われた。	主催:TJF 共催:関西大学 特別共催:駐日韓国大使館韓国文化院、駐日韓国大使館韓国文化院世宗学堂、在日本中国大使館教育処 後援:文部科学省 協力:高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク、高等学校中国語教育研究会
6	高等学校中国語教師研修の共催 (定期事業) **決算額:114,183円** (予算:433,480円) 減少理由:研修本番の出張は2名を予定していたが、1名で対応	7/24-8/6、22名	中国長春市	中国教育部、中国国家漢弁、文部科学省、TJFの共催で、高等学校の中国語教師を対象に2004年から毎夏、吉林大学で実施。中国語のコミュニケーション能力の向上と教授法習得、中国文化理解を深めることをめざす。2010年度から2012年度までの三ヵ年の実施について、TJFと国家漢弁と協議書を交わしている。定員20名の全国公募に対し、過去最高の22名の応募があり、全員の参加が認められた。2009年度以降は現地集合・解散、往復交通費は参加者負担。現地での研修費用、滞在費は中国政府負担。年度当初は新しい試みとして、韓国の高校中国語教師との合同研修を予定していたが、日程が合わなかったため日本の高校中国語教師の単独研修とした。	主催:中国教育部、文部科学省、中国国家漢弁、TJF 助成:在日本中国大使館教育処 研修機関:吉林大学
7	教師研修用教材の作成 (新規事業) **決算額:1,017,573円** (予算:6,701,564円) 減少理由:教材制作は2013年度に変更したため、制作費および謝金が減少	通年	東京	「めやす」が提案する新しい外国語教育への理解と現場への活用には研修が不可欠であるとの考えから2009年より研修を実施している。毎年一ヵ所で研修を実施してきたが今後は全国で800名いると推定される中国語、韓国語担当教師をはじめ外国語担当教員と「めやす」の考え方を共有するため、全国各地でワークショップ型の研修を開催していく計画である。 2012年度当初は、年度内に研修用の教材を制作し、2013年度から各地での研修展開を計画していたが、そのためには、教材とともに講師の育成が喫緊の課題であるとの認識から、まず、講師養成をめざした「めやすマスター研修」(2013年度実施)を優先させ、カリキュラムづくりに取り組むとともに、中国語韓国語以外の言語への「めやす」の拡大を目標に6言語(仏、独、西、露、日、英)のマスター候補探しを行った。研修教材の制作は、マスター研修参加者協力も得ながら2013年度に行うことにした。 学習のめやすの理論的根拠となるソーシャルネットワーキングアプローチ(SNA)をテーマにした本作りについて、ニーズ調査と企画も行った。	
8	外国語教育・多文化理解事業に関するネットワーク活動 (定期事業) **決算額:1,510,724円** (予算:2,737,346円) 減少理由:2013年度以降の研修開催候補地の出張等一部取りやめ		日本国内 各地	高等学校中国語教育研究会(高中研)、中国語教育学会、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(JAKEHS)、朝鮮語教育研究会、言語政策学会、外国語授業実践フォーラムなど中国語や韓国語のみならず広く外国語教育関連の研究会や会合等に積極的に参加し、ネットワークづくりと情報交流を行った。 「全日本中国語スピーチコンテスト」(日中友好協会主催)で高校生に国際文化フォーラム賞を贈るほか、「漢語橋世界中高生中国語コンテスト」の予選大会、「話してみよう韓国語」地方大会高校の部、クムホアシアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会、高中研の各支部主催の学習発表会に対して後援、協力を行った。 さらに、学校に講座がないため中国語や韓国語を学べない中高校生が多いことから、2012年度も外部の機関とともに無料講座の開講に努めた。韓国語は、駐日韓国大使館韓国文化院および駐日韓国文化院世宗学堂との共催で開講したほか、東京韓国教育院が拓殖大学第一高等学校の課外授業として開講するのに協力した。中国語は桜美林大学孔子学院、ISI国際学院での開講に協力した。	

公3 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業					34,490,141円 （内、公3共通費用*18,043,328円）
1	世界の中高校生の交流サイト「つながーる」の運営 （定期事業） **決算額：645,605円**（予算：1,417,550円） 減少理由：システムトラブル対応費を計上していたが、トラブルが発生しなかったため未使用	通年	TJFサイト	SNSを使った交流サイト「つながーる」は、2007年度の開設以来、国際交流に関心のある国内外の中高校生、日本で外国語を学習している中高校生、海外で日本語を学習している中高校生たちが、母語や学習言語を使って、さまざまな背景をもつ人たちと知り合い、コミュニケーションする場を提供してきた。2012年度は、海外の日本語教育の授業の一環としての利用のほか、TJFの交流事業である「日中の高校生のサマーキャンプ」と「日韓高校生交流」の事前交流や準備学習の場として利用された。 一方ここ数年は、ソーシャルメディアが急速に発展し、さまざまなメディアを交流に利用できる環境が整いつつある。2007年度開発当時のシステムを利用する「つながーる」はすでに一定の使命を果たしたと判断し、2013年度内に事業を終了することとした。本事業を通じて得られた関係者とのネットワーク、デジタルツールの学校への導入に際して必要なサポート、授業での活用方法などのノウハウは、「協働を生み出すプログラムの開発」事業に引き継がれている。	
2	協働を生み出すプログラムの開発 （継続事業） **決算額：2,644,211円**（予算：3,935,950円） 減少理由：スタッフの国内出張回数の減少、台湾への出張を2名に予定していたが1名に変更、沖縄への講師派遣回数が講師の都合により減少	通年	沖縄、東京、台湾など	日本の高校生を主な対象として、コミュニケーション力と協働力の育成をめざした交流プログラムや外国語等のカリキュラムを開発、提供する。TJFは、2011年度に、世界の中高校生の交流サイト「つながーる」の運営事業の一つとして沖縄県立向陽高等学校と協力して、中国語の授業を通じてコミュニケーション力と協働力を育成するカリキュラム開発と実践を行ったが、2012年度より本事業の一環として本格実施することとした。 2012年度は、これまでの成果と課題を踏まえて、カリキュラムを改善したほか、コミュニケーション力と協働力をはかるための評価方法としてルーブリックやポートフォリオなどの導入を試みた。一年間の活動の軸として台湾の高雄市立高雄高級工業職業学校（高校）との交流や協同プロジェクトを組みこんでおり、それらの活動に必要な語彙・表現を授業で習得し、高雄の高校生との対話やプロジェクトで学んだ語彙・表現を使うという基本構成である。高雄の高校生との交流は、沖縄と高雄での対面の交流のほか、TV会議やソーシャルメディアなどを積極的に活用した。 ルーブリックを使ってはかった一年間の学習者の変化では、中国語など外国語を使ったコミュニケーションへの積極性、身近な話題についてのやりとりやコラボレーションをするのに必要な中国語の基本的な語彙・表現力、相手の状況に配慮したコミュニケーションのやり方や手段を選択・実行する力、中国語や日本語を使って協働する力において向上が見られた。 今後の課題は、評価方法の充実と、より学習者に主体意識をもたせる活動づくり、ほかの教育関係者と共有するための仕組みづくりである。	関係機関/団体：沖縄県立向陽高等学校、高雄市立高雄高級工業職業学校、羽衣学園中学校・高等学校など
3	日中の高校生サマーキャンプの実施 （定期事業） **決算額：11,462,929円**（予算：12,277,886円） 減少理由：TJFコラボレーターの協力等によるアルバイトの減少、スタッフの中国への事前出張人員数の減少、中国での運営費の減額	7/23-8/2	中国長春市	中国国家漢弁主催の「漢語橋高校生サマーキャンプ」の一環として、TJFは2007年度より「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ」を企画・実施し、中国語を学ぶ日本の高校生92名と引率教師・事務局8名を含む計100名を中国に派遣してきた。2011年度からは、日本語を学ぶ中国の高校生のためのサマーキャンプを同時に開催し、「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」として日中の高校生の交流と語学研修を融合させたプログラムを提供している。 2012年度は、7月23日（月）～8月2日（木）に長春市の日章学園高校を主会場に実施し、日本の高校生86名、長春市の高校生53名が参加した。日本の高校生のうち、8名が東日本大震災特別枠で参加した（参加費8万1千円と燃油特別付加運賃をTJFが負担）。 日中の高校生は、日章学園高校の寮で共同生活を送りながら、互いのコミュニケーションに必要な中国語・日本語を学ぶ授業、学んだことばを使って「サマキャン☆文化祭」をいっしょに企画・実施するプロジェクト、長春の高校生の自宅訪問、買い物体験、市内見学などを体験した。参加した日本の高校生は、「教科書を暗記して話すのではなく、自分が言いたいことはなにか考えて中国語を話す機会が多かったので、実際の場面で使えるという自信がついた」「期間中仲良くなった中国の高校生たちと毎日たくさんのことを話し、帰国後もチャットなどでやりとりを続けている。以前は報道で伝えたられる中国という国に対していいイメージがなかったが、今は、政治的な問題がいろいろあっても、それで自分と中国の友達の関係が変わるとは思わない」等の感想を述べている。	●日本で中国語を学ぶ高校生のためのプログラム（漢語橋） 主催：中国国家漢弁 実施：TJF 受け入れ機関：長春日章学園高校 助成：在日本中国大使館教育処、公益財団法人双日国際交流財団 協力：文部科学省 後援：外務省 特別協力：ANA ●中国で日本語を学ぶ高校生のためのプログラム（日本語橋） 主催：吉林省教育学院、TJF 助成：国際交流基金北京日本文化センター、公益財団法人双日国際交流財団
4	日韓 中高生交流の実施 （新規事業） **決算額：1,213,505円**（予算：1,282,780円）	1/13、2/10、3/10、3/28-4/1、4/28	韓国ソウル	韓国語を学ぶ日本の中高生と日本語を学ぶ韓国の高校生が、協同活動を通じてことばと文化の学びと交流を促進することをめざした交流プログラムを秀林文化財団と共催して実施した。日本側参加者は、書類審査と面接審査で選ばれた9名（中学3年生女子2名、高校1年生女子4名、高校2年生女子3名）。韓国側参加者は、高校1年生女子7名、高校2年生女子3名、男子5名の15名。日本側は3回の事前研修で、韓国語の学習、ダンスの練習、自己紹介ビデオや各自の研修目標づくりを行ったあと、本番に臨んだ。韓国ソウル滞在期間中は、韓国の高校生とのコミュニケーションに必要な韓国語の習得をめざした授業をソウル大学言語教育院の協力を得て実施するとともに、K-POPダンスや買い物など、中高校生が関心をもつテーマで協同活動を行った。	主催：秀林文化財団、TJF 後援：神奈川韓国教育院、埼玉韓国教育院、東京韓国教育院、千葉韓国教育院 協力：国立ソウル大学言語教育院、光新高等学校、韓国日本語教育研究会、学校法人秀林外語専門学校、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク 協賛：アシアナ航空

5	交流事業に関するネットワーク活動 (定期事業) **決算額:480,563円** (予算:1,252,070円) 減少理由:遠隔地の学会大会への参加取りやめ、関係者との会合減少など	通年	東京、埼玉、大分など	TJFが交流事業を推進していくためには、交流学習や国際理解教育、異文化間教育、情報教育等の分野における国内外の教師や専門家とのネットワークが重要である。2012年度は、海外に日本語教師として派遣された日本の小中高校教師を会員とする国際教育ネットワーク/REX-NETの活動に協力したほか、日本国際理解教育学会研究大会、情報教育関連の研究会やセミナーなどに参加し、関係者とのネットワークづくりと情報収集を行った。	
公4	**広報活動**				**18,111,437円 (内、公4共通費用*11,125,187円)**
1	機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行とサイトの運営 (定期事業) **決算額:2,625,508円** (予算:3,207,888円) 減少理由:寄稿だけでなく取材を内部でまとめた原稿が多かったため謝金減少	4月、7月、10月、1月 A4判、2色、16頁、年4回、4,500部	日本国内、海外、TJFサイト	年間4号それぞれ事業と関連するテーマで特集を組んだ。94号では、公益法人に移行して1年がたち、改めて「公共を担う」ことについて、公益法人やNPOに関わる人たちの話を聞いた。95号では21世紀に求められる力は何かについて考え、96号では21世紀に求められる力を育てる取り組みについて紹介した。97号は、新しい「くりっくにっぽん」を紹介するとともに、明治大学国際日本学部の2年生ゼミと連携した様子をルポルタージュした。	
2	TJFの事業報告と広報資料の作成 (定期事業) **決算額:1,255,347円** (予算:1,319,588円) 減少理由:パンフレット新規作成をやめ、既存の増刷で対応	事業報告 日:A4判、36ページ、4色、8月発行 英・中・韓:A4判、8ページ、一部カラー、9～10月発行	日本国内、TJFサイト	日本語版『事業報告』では2011年度実施事業の全体像と各事業のデータ、6年にわたった「外国語学習のめやす」作成プロジェクトの軌跡をまとめた。2012年度の主要事業についても展望した。日本語版700部、英語・中国語・韓国語版を各100部制作し、関係者に配布するとともに、ウェブサイトに掲載して広く公開した。 当初、ファンドレイジング用のカラーパンフレット(日本語版)の作成を予定していたが、広報資料だけでなく、機関誌、ウェブを含めた視点で広報戦略を立ててから作成することが望ましいと判断し、2012年度は既存のパンフレットの増刷で対応した。 TJFの新しい広報の場として、2012年5月にfacebookに公式ページを開設した。スタッフそれぞれが、事業の現場をリアルタイムでレポートしている。	
3	TJFのウェブサイトの運営 (定期事業) **決算額:3,105,395円** (予算:4,567,075円) 減少理由:ウェブサイトのリニューアルを2013年度に変更	通年	TJFサイト	ウェブサイトでの動画の提供に伴う通信量の増大、クラウド上のサービスの利用を想定し、基幹通信回線の変更、通信機器やファイルサーバーの入れ替えなどを行った。また、個人情報等漏洩対策のため、セキュリティ機器類の増設、ネットワーク設定の見直しをおこない、セキュリティ体制を改善した。 中国在住のユーザーに快適な環境でTJFのウェブサイトを利用してもらうための中国国内サーバーの設置は、中国の法令で義務と定めている「ICPサイト登録」の申請に必要な条件にTJFが満たしていないため断念した。一方で最近では中国国内の通信インフラが改善しており、通信速度がウェブサイト閲覧の問題になるケースが減少傾向にあるため、この問題に関しては対応する必要性がうすれている。引き続き状況をみて、対応策を検討する。 ファンドレイジングを視野に入れたウェブサイトのリニューアルは、広報戦略が整う2013年度に着手することとした。	

*各公益目的事業に係る費用(給料手当、福利厚生費、消耗品、賃貸料など)